熊野那智大社

幕末の風雲児も「ヤタガラス」を歌った。

三本足のカラス「八咫烏（やたがらす）」は熊野のシンボル、神の使いとされている。日本サッカー協会のシンボルマークにもなっているこのカラス、ルーツは古代中国にあり、朝鮮半島を経て日本にやってきたらしい。大切な約束を書きしたためる「牛玉宝印（ごおうほういん）」として、日本全国に広まったヤタガラスの物語をどうぞ。

日本サッカー協会のマーク

熊野三山のシンボルは、三本足のカラス「ヤタガラス（八咫烏）」だ。そう、日本サッカー協会のシンボルマークにもなっている三本足のカラスは、熊野にいたのだ。

日本サッカー協会のホームページには「中国の古典にある三足烏と呼ばれるもので、日の神＝太陽をシンボル化したものです」とある。同協会は日韓、ドイツでのワールドカップ出場の前には、熊野三山で必勝祈願を行っている。

中国から高句麗（こうくり）、そして熊野へ

中国では前漢時代から三足烏が書物に登場し、王の墓からの出土品にも描かれている。二千年以上前のことだ。太陽の象徴として崇められていたという。

なぜ三本足なのだろうか？

陰陽五行説で、説明されることもある。二本足の二は陰、これが三だと陽になり、太陽の象徴にふさわしいからというのだ。また、三本の足は、朝日、昼の光、夕日を表すという説もあるそうだ。

韓国のテレビ局も三本足カラスに注目

朝鮮半島にも三本足のカラスが登場する。昔の高句麗、今の北朝鮮のあたりと思われる。

少し前、韓国のテレビが朝鮮半島の歴史を舞台にした大河ドラマを放映したことがある。そこに三本足のカラスをあしらった国旗が登場した。韓国の人々はあれは何？と疑問に思ったそうだ。高句麗にまでは来ていた三本足カラスは、朝鮮半島南部にはやってきていなかったようだ。

熊野本宮大社

熊野速玉大社

そんなこともあり、韓国のメディアが中国～朝鮮半島～日本へと続く三本足のカラスを追いかける番組を企画し、先日カメラが熊野に入った。かなり学術的な裏づけのあるドキュメンタリー番組のようで、放映は今秋以降の予定だという。

はじめて「熊野の神」が現れた瞬間

朝鮮半島を飛び越えて、ヤタガラスは熊野へ「神の使い」としてやってくる。そして有名、無名の二人の人物を道案内したと伝えられている。

一人は神武天皇。彼ははるか西から瀬戸内海を通って近畿地方へと軍を進めてきたが、大阪で戦に敗れた。神武天皇は、日の神（アマテラス）の子孫である自分たちが、西から東へ、日の出の方角に向かって戦いを仕掛けた故の失敗と考えた。そこで紀伊半島をぐるっと回って、今の新宮あたりから攻め上ることにした。その時、神武天皇を道案内したのがヤタガラスだといわれている。神武天皇は、新宮から吉野、そして奈良の橿原に入り、ここに大和朝廷が誕生する（神武東征）。

カラスに導かれたもう一人は地元の猟師。イノシシを追って山に分け入ったところ、カラスが自分の前を飛んでゆく。ついて行くと一本の大木にたどり着いた。そこに光るものがある。「これは奇っ怪なこと」と光に向かって矢を向けると、声が聞こえてきた。「我はかくかくしかじかの熊野の神なり…」。猟師は神を祀るお社を建てた。熊野の神が初めて私たちの前に現れた瞬間だと伝えられる。

上から熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の牛玉宝印

熊野にはカラス文字（写真参照）でかかれた「牛玉宝印」と呼ばれるお札がある。その裏に、約束事などを書き、もし約束を破ると熊野のカラスが一羽（または三羽）死に、約束を破った本人もまた罰を受けると信じられていた。

江戸時代には遊女が証文代わりによく熊野のお札を利用したという。通ってくる男たちに対して「ウチの気持ちは変わりまへん」とかなんとか書き付けて。

高杉晋作の都々逸の主人公は、晋作の故郷・長州の遊女。惚れた晋作様とゆっくり朝寝をしたいものだ、この際ほかの男たちと交わした証文をすべて破り捨て、熊野のカラスを一挙に殺してでもと。自らの死を賭して朝寝を選ぶという遊女の熱い気持ちを表現した都々逸。それにしても高杉晋作、見事に女心を歌ったものだ。

「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」（辞世の句）、幕末を駆け抜け、二十七歳で夭逝した高杉晋作。彼が、その遊び心を託すほど、熊野のカラスは全国に広まっていたということだろう。

（紀野博）

ヤタガラスに託した高杉晋作の遊び心

幕末の風雲児・高杉晋作が作った都々逸にこんなのがある。

三千世界の烏を殺し
主と朝寝がしてみたい

神の使いも一歩外へ出ればにっくき害鳥？

新宿熊野神社から少し目を上げれば、東京都庁がある。

6年前、都庁は「カラス対策プロジェクト」を立ち上げた。生ゴミをねらうカラスに頭を悩ませてのことだ。

プロジェクトはカラスの頭の良さとの戦いだった。

ネットを使う、ゴミ袋の色を変える、袋に匂いを付ける、カラスの人形を使う、原点に戻って蓋付きのゴミ容器を使う、そして反対意見もあったものの捕獲作戦を行う、等々。

そのかいあってか、6年前には都内に3万5000羽以上いたカラスが、現在では半分以下に減ったという。

古代中国では太陽の象徴、熊野三山では神の使い、そして都会ではゴミを突っつく、にっくき害鳥。数奇な運命に翻弄され続けるカラスではある。